

健康文化

老人と共に夢を求めて

川原 暁子

当法人は1981年3月、愛知国際病院として発足しました。当時50床の小病院でしたが、隣接の財団法人アジア保健研修所と協力し、日本だけでなくアジアの健康の増進にも努力してきました。また地域と共に、地域に支えられる医療、ということもモットーの一つであり、その地域の高齢化に伴い、対応が考えられました。そして1992年4月11日、老人保健施設愛泉館の竣工に至りました。

愛知国際病院の、在宅介護を援助する為の訪問看護が始められたのは、開院間もない1982年6月のことでした。当時、東南アジア、オーストラリア等から研修生を迎え、彼らから多くを学んだ私達でした。それは、地域保健医療の大切さ、私達は患者さんやその家族からしっかり希望を聞くべきであること、どんな暮らしぶりかをしっかり見るべきこと等でした。そして訪問看護をもっと頑張って進めていきたいと強く思ったのです。

私の医師としてのスタートは麻酔医でした。従って麻酔をかける対象者は乳幼児から高齢者まで広範囲でしたが、老人を家族で看取る経験は浅く、毎日が勉強であり、自分の死についても考える様になったのです。そして、訪問に必要な簡単な外科的技術、皮膚科の処置等を次第に身につけていきました。

1987年老人保健施設のモデル施設が全国7箇所開設した頃から、私達愛知国際病院の在宅ケアに関わる者達も、このことに関心を持つ様になりました。日本の高齢者問題の特徴は、寝たきりや痴呆の方の世話は女性の献身的介護であると言われていています。私達が訪問する家で介護に当たっておられたのは、奥さん、お嫁さん、又は娘さんです。介護する女性はみなヘトヘトでした。しかし、女性の方が長寿なので、高齢者問題は女性問題になりました。夫亡き後の妻を誰が介護するのか。一度入院されると退院されない方も多くなりました。病院はナースもナースエイドもいるので家庭よりサービスの良い面もあります。

しかし、患者さんは自立心を失い、やがて寝たきりになる方もあり、入院が年余にわたるケースもみられました。そこで老人保健施設愛泉館が家庭復帰への中間施設として皆様のお手伝いをさせていただきたいと思ったのです。さらに労働人口の減りつつある日本では、職業人としての女性への期待も大きくなってきました。だから女性だけが社会活動を辞めて介護するわけにも参りません。保健、医療、福祉のネットワークを作り出すため、2000年4月、介護保険制度が生まれたのです。

愛泉館設立を前にヨーロッパの高齢者福祉先進国と言われるイギリスやスウェーデンを視察しました。一番の驚きは施設でありながら施設らしくない、家庭的雰囲気でした。又、ヘルパーやナース等の訪問を受けながらの一人暮らしの老人が多いことでした。独立心の旺盛な老人が多いことも、日本との違いに驚かされました。

愛泉館設立に続いて1997年4月1日に日進在宅介護支援センター愛泉館が、2000年4月1日に指定居宅介護支援事業所愛泉館が開設しました。ともに地域介護を推進する働きであります。愛泉館の定員は、入所48名、通所16名の小規模施設です。職員構成は医師1名、看護婦10名、介護職員22名、作業療法士1名、理学療法士1名、音楽療法士2名、支援相談員1名、栄養士1名、事務員2名、労務員1名、の合計42名で、ケア・マネージャーやボランティア・コーディネーターを兼務している者もいます。

愛泉館の理念は

1. 高齢者自身の気持ちを重視し自己決定を重んじる。
2. 入所中は出来るだけ家庭に近い生活をしていただく。
3. 地域に開かれた施設として地方自治体、他院や在宅ケアの関連チームとの協力を重視する。又、ボランティアの導入を図る。
4. ADLの向上と共に、QOLの向上を目指す。

としました。

入所者もより高齢化し、身体の障害も重度化してきたので、リハビリのプログラムの工夫が必要となりました。その取り組みの中で出会ったのが、Baltes, P.の「結晶性知能と流動性知能の年齢曲線」(図1)です。高齢化し、失見当識の見られる方々のQOLを高めるプログラム。ケアプランには組まれない個々の喜びとは何か、昔修得された芸術性(音楽、俳句、短歌、絵画等)を引き出す

為にはどうすれば良いのか。一人の人間としての尊厳を保てるような接し方、プログラムを真剣に考えるために、一人一人の人生哲学、信仰、興味等々をしっかりと理解し、特に忘れてしまったように見えるその人の夢を思い出していただくことに努めました。その10年間の取り組みの中でのエピソードを紹介しします。

「事例1」 MH氏 92歳 女性。1995年12月26日～1998年7月3日の間に、当所のショート・ステイと入所を21回利用されました。N市で独居生活。同市に長男、長女もそれぞれ家庭を持ち、時々訪れ食物の差入等の援助をしていましたが、在宅時も入所時も臥床がちでした。ところが施設での琴との出会いがM氏の生きる力を蘇らせることになったのです。ボランティアによる「琴の演奏会」があり、演奏家の「どなたか弾いてみられませんか？」との誘いに応じたのはMさんと100歳のSさん。Mさんが「六段の調べ」を爪弾き始めると、Sさんも拍子を取りながら応援、シーンと静まりかえった会場が終了と同時に大拍手となりました。その後、琴の師範のボランティアを招き、週1回Mさんがレッスンを受けることになりました。レッスン日の朝は朝食に出された牛乳やジュースを飲まずに袋に忍ばせ、玄関で心待ちにされる姿が見られました。到着と同時に丁寧な挨拶をされ、飲み物を差し出されるのです。彼女の弾く琴の音色に聞き入る他の御利用者の一人も、その指先が曲に合わせ美しく動いていました。在宅時も琴の練習を生活の中心におかれ、その為に食べる意欲も出て来たと話されました。琴に出会う前に一度退所後訪問をしたおり、臥床がちで食べる意欲も何をする意欲もないと話されていた事を思い出しました。その後、家族の都合で特養に移られ、5ヶ月後に召天されたとのこと。後に娘さんが来館、Mさんにとって琴が晩年の生き甲斐になったこと、家族間の確執や悩みが浄化され、穏やかな終末であったことなどを話されました。今尚、Mさんが琴に向かう真摯な姿と澄んだ琴の音色が心に蘇ります。

やがて開設10年目を迎え、当初からの利用者の方々も介護者もより高齢化し、人生の終末をどこで迎えるか？が問題になってきました。その中で「愛泉館は単なる施設ではなく、もうひとつの家庭です。」と言われる家族の希望で、施設での看取りを経験したので紹介します。

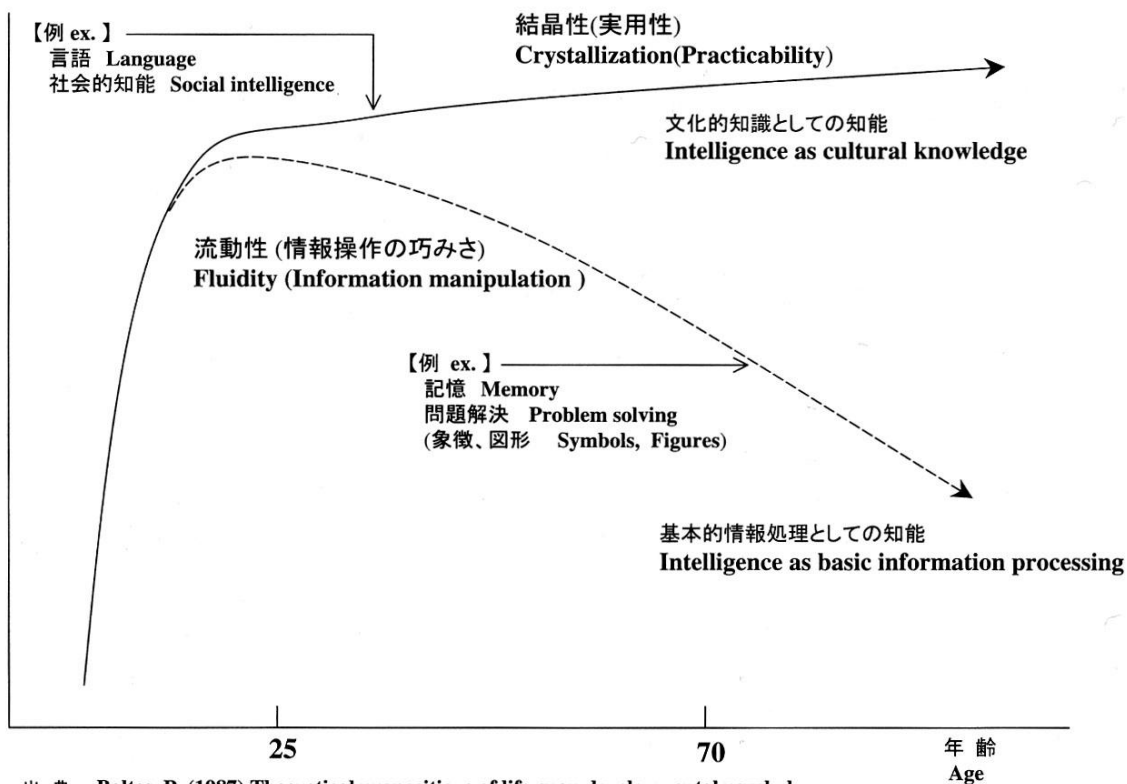
「事例2」 HS氏 89歳 男性。長い間小学校校長を務め、退職後70歳まで短大講師として児童文学を教えていた教育者でした。それを退職し、妻に先立

たれたこともあり、徐々に痴呆症状も出現してトラブルも多くなり、1992年12月、長男夫婦の所からN市の長女夫婦の家に転居されました。周囲に友人知人もいないことから、1993年4月、当施設を初回利用され、その後デイケア、ショート・ステイ19回、入所13回を繰り返し利用されました。その後、8年間で痴呆は更に進行しましたが、俳句の会での活躍、書道の取り組み等、様々なプログラムの働きかけにより、まさに結晶性知能の開花、といった素晴らしい数多くの作品を残されました。スタッフにも「いつもご苦労様」「頑張りなさいよ」といった励ましや気遣いの言葉がけをして下さる穏やかな日々が続いていました。長女は入所者の家族から、介護者同士の仲間が欲しいとの要望で、中心となって「家族会」を立ち上げて下さり、3ヶ月に1回開催される家族会では、経験豊富な助言をされました。家族会に支えられ、育てられた愛泉館でもありました。しかし、そのうち本人は段々今やっていることも数分のうちに忘れ、着衣失行などあり、次第に体力も低下し、2000年7月除脈と心不全により、併設病院へ入院となりました。その間に転倒骨折、結局4ヶ月半の入院生活となりました。退院後施設に再入所されましたが、その後再びレベルダウンし、家族もこれ以上の延命医療を望まず、本人の好きな当施設での看取りを希望されました。スタッフの中のここで看取ってあげたいという気持ちが確認でき、ターミナルケアに取り組むことになりました。ターミナル期は痴呆症の為、転倒の危険が多く、目が離せない状況もありましたが、家族も頻繁に面会され、共に過ごす時間も多くなりました。最後の晩は、関わりの深かった音楽療法士も駆け付け、枕元でバイオリンを奏で、付き添ったナースと娘は彼の唇を脱脂綿で濡らしながら、彼の思い出を語り合いました。そして、2001年1月20日昼過ぎに召天されました。死後の手配もスムーズに故郷に向かって出発されました。

これらの方々はおいによって生命力が低下していく中でも、最後まで夢を持って生き、皆に影響を与えた人達でした。このような経験から、私は、人生において最も大切なのは夢を追い求めることであり、それは年齢とは関わりなく、いつも人生に輝きを与え続けるものであることを知りました。

(医療法人財団愛泉会 老人保健施設愛泉館名誉施設長)

結晶性知能と流動性知能の年齢曲線 Life-span development of Crystallized intelligence and Fluid intelligence



出典：Baltes, P. (1987) Theoretical propositions of life-span developmental psychology
Source On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23

(図1)